

〈本文〉

十二番

左 煤掃すすはき

何方いづかたに行ゆてあそばん煤すすはらひ

拳白

右 勝

煤すすとりて寺てらはめでたき佛ほとけ哉かな

不卜

すゝはきの日の遊あそび所ところを侘わびたるも

優ゆうにして艶えん也。右は寺てらの煤掃すすと

思おもひよりたる、先珍ますちん重ちゆうにや。両句

滑稽こころにかんずのまことをうしなはず、感かん心しん。

わきがたく侍はべれども、目めでたき佛ほとけ哉かな

と云いし句くのいきほひ、猶なほまさり

て聞きえ侍はべれば、為勝かちとす。

〈現代語訳〉

左 煤掃すすはき

煤すすはらいの日は、わが家に居てもじやまになり、よそ様の家を訪ねてもやはり煤すすはらいに忙いそしく、客を迎えてはくれない。さて、どこに行つて（俳諧に）遊あそんだものだろうか。

* この句は、『秋津島』『祇園拾遺物語』にも同形で所載。『宰陀稿本』では上五「何方へ」。「煤掃すすはき」は十二月の大掃除のことである。「すすはらい」とも言う。

事始めである十二月十三日を江戸城や禁中で煤掃の日と定めていたが、実際には十三日では早すぎるので、それ以後の適当な日を選んで行なうのが普通であった。元禄九年刊の『芭蕉庵小文庫』に、当時の煤掃を活写した曲翠の文章がある。「あけぼのの空よりもものはたはたと聞ゆるは、畳を叩く音なるべし。

今日は師走の十三日、煤掃のことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例あることにして、ただ並みなみの人の煤掃すすく体ていこそいとおもしろけれ。各々門かどさしこめて、奥の間を屏風に囲ひなし、火鉢に茶釜をかけて、姫おんなが帷子かたびらの上張うわばり、爪先見えたる足袋もいと寒く、冬の日影の早く昼になりゆき、庭の隅・調度ども取り散らしたる中に、持仏の後向きたるぞ、目には立つなれ。家の童えんの椽えんの破れ・簀すの子の下を覗きまはるは、何を拾ふにやとあやし。味噌と呼よばる大男おんなの、袋かぶり蓑着たるもめづらかに、米櫃こめびつのサン打ちつけ、俎まないたしらせ、行燈あんどん張り代へて、田作り鱈なます・浅漬あまひつけの香り花やかに、上下の膳かみしもを据え並べたるに、ほどなく暮れて、高髯たかねとはなりぬ。／煤掃や暮れゆく宿の高髯」。

右勝

煤掃の日、寺でも一年の煤を取り去って、めでたく新年を迎える支度ができた。きれいに身を拭われた仏さまの像が、あらためてありがたくなったように見える。

* 「めでたき」が上下に掛かり、「寺はめでたき」と「めでたき佛」の両方の意味がこめられているのだろう。貞門風の古い風体の句。作者の不卜は本書『続の原』の編者であり、句合では四季に一句ずつ登場するが、春夏秋冬はいずれも「持」（引き分け）であった。ここは最後の一番なので、発句の評価ゆえというよりは編者を尊重するために、芭蕉から「勝」をもらったと思われる。

〈判詞〉

左句のように、煤掃の日に俳諧に遊ぶ場所がなくて嘆くという心のはたらきも、優雅であり美しいものである。また、右句は、寺の煤掃を着想した点が、まず第一にすぐれている。両句とも、「滑稽のまこと」すなわち俳諧の本質を失っていないことは感心である。勝ち負けを決めることがむずかしいのですが、「めでたき仏哉」と言った句の勢いが、より勝つて聞こえますので、右句を勝ちとする。

* 「侘たる」の「侘ぶ」は、何ごとか欠落や不足を嘆くこと。挙白の左句は、ほんらいは「老人が家におれば邪魔になる」（新・古典文学大系『元禄俳諧集』・注）というだけの意で詠まれたものかもしれない。右のように「俳諧に遊ぶ場所がなくて」としたのは、芭蕉の好みに近づけた解釈である。元禄二年五月末、出羽大石田にての「さみだれを」歌仙の名残ウラ一く三句に、

雪みぞれ師走の市の名残とて

曾良

煤掃の日を草庵の客

芭蕉

無人を古き懐紙にかぞへられ

一栄

という、挙白の句から発想されたいし運びがある。「優にして艶」は、上品でやさしく美しいこと。この判詞としては、現実生活の「煤はらひ」から遠ざかり俳諧風雅の世界に「あそばん」とする心の動きが「優にして艶」なのである。また、「滑稽のまこと」をうしなはず」とは「俳諧の本質をうしなわないでいる」ということ。それに続く部分は、「感心わきがたく」と続いているという可能性もあるが、それだと意味が取りにくいので、「感心」で文が切れるものとして右のように訳した。「わきがたく」の「わき」（分き）は、力行四段活用の動詞「分く」の連用形で、判詞の中の語であるから、勝ち負けを決める意となる。